校長室だより

共学共高

第106号

令和８年 11 月 11 日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

初めて伊勢志摩へ～関西修学旅行編１

11 月 2 日（月）2 学年関西コースの修学旅行へ同行した。昨年までは金沢を訪れていたが、62 期生からは最初の行き先を伊勢志摩へと変更している。私自身はこれまで沖縄とケアンズの修学旅行へ同行していたが、関西コースは初めてである。

午前 7 時 30 分の集合時間を前に、63 名の生徒全員が東京駅の団体集合場所にそろう。幸先の良いスタートである。東京駅から新幹線で名古屋へ向かい、名古屋から伊勢市まで近鉄特急を乗り継ぐ旅だ。







伊勢市駅からは専用バスに乗って、夫婦岩めおと横町へ移動する。この日は班別行動がないので、全体で行動を共にする。めおと横町では昼食をいただくが、なかなか豪勢である。係りの方が「松坂牛です」と紹介すると、生徒たちからは歓声が上がる。

海を見ながら、また友と歓談しながら美味しい昼食をいただく。食べ終わった生徒から横町のお土産店などを見て回る。地域ならではのお土産がいろいろあって見ていても飽きない。









続いて、二見浦の散策である。海に浮かぶ夫婦岩は、二つの岩が太い縄でしっかりと結ばれている。二見興玉神社（ふたみおきたまじんじゃ）でお参りをする前に、ひしゃくに水を汲んで身を清める。左手に水をかけ、続いて右手に水をかけ、再び左手の手のひらに水をため、口に入れてすすぐ。その左手に水をかけてひしゃくを置く。この作法をひしゃくに水を継ぎ足すことなく行うのである。中には、恋みくじをする生徒たちもいて、見せてもらうと「中吉」か「大吉」であった。よかったね。神社でのお参りは、２礼２拍手１礼で行う。あいにくの雨模様ではあったが、お参り後に海岸の砂浜でわずかばかりの時間を過ごす生徒たちもいる。今日の参拝は、明日の伊勢神宮参拝前に身を清めるという意味がある。かつては実際に海に入って身を清めたようだ。







再び専用バスに乗って、地域の産業を学ぶためにミキモト真珠島へと向かう。世界で初めて養殖真珠に成功した御木本幸吉氏のエピソードもガイドさんから伺うことができた。養殖に成功するまで百万個以上の貝を使ったようだ。不屈の精神の持ち主である。到着すると、最初に真珠ストラップ作りである。各自で一つ、真珠のストラップを作るのだが、ビニル袋の中に必要なパーツがセットになって入っているので、係りの方の説明を聞いて、手順書にしたがって完成させればよい。私も挑戦したが、大変である。老眼にはきついのだ。真珠に穴が開いているのだが、糸を通すための穴がどこにあるのかわからない。適当に探るのだが、時間がかかって仕方ない。生徒たちはすいすいと糸を穴に通してつなげていく。見かねた係りの方が眼鏡式のルーペを貸してくださった。それをかけるとよく見えること。私もすいすいと糸を穴に通すことができた。歳はとりたくないものである。

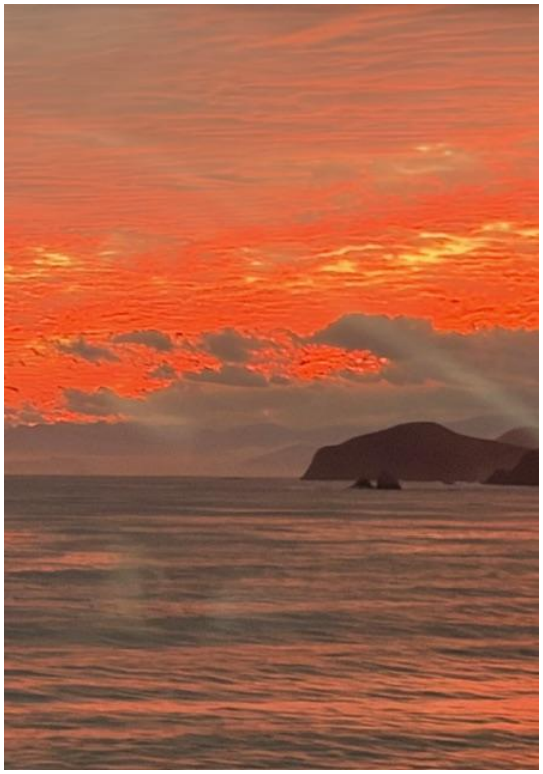



続いて、ここでしか見ることのできない、海女さんによる実演の見学である。小型船に乗った海女さんたちが生徒たちの目の前にやってくる。映像でしか見たことのない世界が目の前に繰り広げられるのだ。見事に海中のサザエと収穫して桶に入れると、生徒たちから拍手が送られる。海深く潜ってから海面に戻るときにはゆっくりの上昇し、「磯笛」と呼ばれる、「呼吸を整えるときに喉から発する口笛のような音」が特徴のようだ。これは海女さんたちの身体を守るための動作である。後日、ある生徒たちから「化学の問題を出してほしい。」と言われたので、私は「海女さんが海に潜って上昇する際に、ゆっくりと上がってくる理由を、肺にかかる圧力と体積との関係から説明せよ。」と即興で出題したが、その生徒たちは「ちょっと時間をください。」と言いながらも、見事に正解した。さすがである。

続いて、御木本幸吉記念館や真珠博物館を各自で見学する。200 万円を超える真珠のネックレスもあって、驚かされる。「奥様にどうですか？」と言ってくる生徒もいるが、買えたものではない。記念館では、さまざまな展示を見て、養殖真珠がどのようにつくられるのか、学ぶことができた。




この日の体験学習はこれで終了。専用バスに乗って、宿へと移動する。海沿いの宿へと向かう途中、見たこともない夕景が目に飛び込んでくる。あまりにも美しすぎて、自然の雄大さに驚かされる。白梅生たちの日頃の行いが良いから、この夕景を見ることができたのかもしれない。




宿の夕食も豪勢である。一人一尾の伊勢海老が出るとは。しかも目の前で焼いてくれるのである。香ばしい香りが食事会場を覆う。教員チームに伊勢海老が届くまでそれなりの時間を要したので、届いたときには私の元には他のおかずは何も残っていなかった。生徒たちも海の幸を堪能した。（つづく）






（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）